

### Ⅲ 発達と発達課題

## 5 子供の理解と指導

清水 勇

### 1 到達目標

- (1) 誰のために、何のために、何を理解するのかを学ぶ。
- (2) アセスメントのあり方と方法を理解する。
- (3) 保育者、教師自身の子どもを理解する態度と自己理解の大切さを理解し、現場で活用できるようにする。

#### 【キーワード】

自己理解、自己受容、自己指導、共感的理解、客観的理解

### 2 誰のために、何のために、何を理解するのか

#### (1) 子ども理解とは

4歳のAさんはお腹や頭が痛いと訴えたり、怪我をしたと言ってよく職員室にくる。このような子どもに対して「ここは先生たちのお部屋だよ」と言って追い返すことはない。たぶん、「最近よく職員室にくるようになったのはなぜだろう」とAさんの行動の理由を考え、弟ができて気持ちが不安定になっているのかもしれないなど、行動の背景になる理由に思い当たることがある。

このように、子どもの言動の背景を探ることが子ども理解である。子ども理解は問題のある子に対してだけでなく、全ての子どもに対して、日常的に子どもとふれあう中でいつも行なっているのである。

#### (2) 誰のために理解するのか

ロロ・メイ (Rollo May) は「人間が人間に贈り得る最高の贈り物は〈理解〉である」と述べている。保育者・教師が子どもの心の動きをありのままに理解しようと努めることにより、子どもは自分のことを話したくなる。このように、自分がどんな人間なのかを相手に表現することを「自己開示」という。

Aさんの例で、保育者が子どもの背景を考えて「Aさん、お姉さんになったね」と声かけをしたとき、Aさんが弟や母親への不満を口にしたら、Aさんは自分の感情を自己開示したことになる。あるいは「お姉さんになったんだ」と得意そうな表情を見せるか

もしない。

子どもは自分のことを表現することで、自分がどのような人間なのか気づいたり考えたりできる。このように、自分の欲求、興味、関心、能力、価値観などに対する可能性を積極的に自覚できることを「自己洞察」とよぶ。誇らしげなAさんに保育者が「すごいねー」と感心することで、自覚していなかった弟ができた喜びを自覚することになれば、保育者の子ども理解がAさんの自己洞察を促したことになる。自己洞察ができれば、子ども自身の自己理解が深まり、自分の問題を自分で改善・解決できることになる。

### （３）何のために理解するのか

#### ①自己理解

子どもの自己理解を充実するためには、保育者・教師の受容の態度が必要である。受容とは自分自身について、また対人関係の中で、現実の自分、現実の場面（状態、関係）と「こうありたい」と思っている要求水準とのズレに対して肯定的・積極的な認知や態度をとることである。

Aさんに対して「子どもはこうすべき」という大人の要求水準で保育室に戻すのではなく、職員室に何度もきてしまうという現実をありのままに受け入れることが受容である。

保育者・教師が受容すると、子どもの自己受容がすすみ自己理解が深まる。逆に、保育者・教師の要求水準が高過ぎると子どもはありのままの自分を出せず、無理をしてよい子を演じたり、わざと保育者・教師のいやがる行動をとって自己防衛的になる。その結果、子どもは自分の心の動きを明確に知覚できず、自己理解を発達できなくなる。

#### ②自己受容

ロジャーズ（Rogers. C. R.）によると、「自己受容」とは、あるがままの自分を受け入れることである。自分の欠点や短所もそのまま受け入れ、改善に努めることである。自己を受容すると、他者にも心を開くので他者と交わり、自発性に富み感受性が豊かで自己を高めることができる。

### （４）何を理解するのか

子どもを理解するとき「子どもの言動は氷山の一角である」ことを前提にする。目の前にいる子どもの言動は、氷山の海面上の部分であり、目に見え・聞こえる言動の背景、つまり海面下の氷山の部分に子どもの言動の誘因・動機及び無意識の心理過程がある。

このような海面下の部分を探ることが、真の子ども理解である。そのためには、日ごろから子どもの言動を偏見のない目と心で観察し、耳を傾けて子どもの言葉と心を聴き、真心をこめて子どもと話すことが基本である。

### 3 アセスメントのあり方

#### (1) アセスメントとは

カウンセリングでは、来談者（クライアント）を理解するために、来談者がどのような人か、何に悩んでいるか、その問題はどこからどのようにして生み出されてきたか、現在何を求めているか、現在の苦しみから逃れるにはどのような対処方法が考えられるかなどを具体的に明らかにし、見通しをたてる。このような理解のための作業がアセスメントである。

#### (2) 理解の2つの側面

子ども理解は、共感的理解と客観的理解の二つの側面があり、統合して理解することが必要である。

##### ① 共感的理解

子どもに対する深い関心と尊重の理念を持ち、子どもの身になって子どもの心を感じ取りながら理解しようと努めることである。それによって、子どもの独自の感じ方、思い、考え方などを理解でき、子どもの内面的世界を理解できる。ロジャーズ(Rogers. C. R.)は「クライアントの私的な世界をあたかも自分自身のものであるかのように感じ取り、理解すること」であると述べている。具体的な方法としては話し合い・面談・相談、日記・作文などがある。共感的理解で注意することは「子どもの身になる」あまり、子どものペースに巻き込まれ、主観的になってしまうことである。

##### ② 客観的理解

子どもとの間に心理的距離をおき、冷静に、いろいろな視点から、公平で偏りのないように理解することである。具体的には、観察法、標準化された検査や調査がある。

しかし、子どもの心は常に動いていて複雑であり、観察、検査・調査で得られた結果だけから子どもを理解することは危険である。主観的理解をより客観的にするために客観的理解が必要であり、共感的理解との統合が求められる。

#### (3) アセスメントの方法

##### ① 観察法

観察は保育者・教師が日常的に行なっている。しかし、科学的な方法としての観察法は明確な目標・場面を設定し科学的記録法を用いるもので、組織的自然観察法と呼ばれる。この方法は、特別な設備や条件を設定せず自然の中で生じる言動や出来事をありのままに観察し、記録する。簡便で、本質をとらえやすいので園・学校で使いやすい方法である。

記録には、子どもの言動を起きた順に記述していく行動描写法（逸話記録法）、生じるのが予想される行動をあらかじめ表にして、あてはまる行動が見られるたびにチェックしていく行動目録法、観察された子どもの特性を一定の基準に基づいて段階づけ、記録

する評定尺度法，子どもの行動の方向や内容を記号化して，図式的に記録する図示法，機器による方法がある。

どの記録法を用いるにしても，子どもの目の前で記録しないようにし，できるだけ記憶の新しいうちに記録したいものである。観察法の短所は，行動が生じるまで待たなければならないこと，表面的な把握になりやすいことである。

## ②面接法

面接の形態によって，一対一で行われる個人面接と，面接を受ける被面接者が複数である集団面接があり，訪問面接，来談面接，呼び出し面接もある。また目的によって，理解のための面接（調査的面接），説得のための面接，指導・改善のための面接（臨床的面接）などに分けられる。

面接法では，面接者である保育者・教師と面接を受ける子どもとの間に「ラポルト (rapport)」が確立されていることが前提となる。ラポルトとは，被面接者が面接者に対して防衛的にならず，率直に自己の内面を表現できるような心のつながりをもつ人間関係である。気楽で親密な関係であり，信頼され尊敬される関係であり，合理的で客観的に理解する関係でもある。

ラポルトができるためには，面接者が子どもに対して思いやりのある，開かれた温かい態度であり，子どもに対して純粋な関心をもち，話をしっかり聴き，子どもをありのままに受容することが求められる。

## ③テスト法（検査法，調査法）

子どものもつ特性を組織的に測定し，その結果から妥当な判断や予測を行ない，適切な指導を行なうために開発された心理テスト（心理検査）をもちいる方法である。テスト法は，保育者や教師の個人的経験の影響を受けて，子どもの理解が歪んだり偏ったり，独断的になるのを修正したり，客観性と科学性によって理解を補うことができる。

### [a. 知能検査]

個人の知能の働きを客観的に測定するものである。1905年，ビネー (Binet. A.) によって開発され，ターマン (Terman. L. M.) が大規模な標準化を行ない，スタンフォード・ビネー・テストを公にした。わが国では，鈴木ビネー，田中ビネーがよく使われる。1949年，ウェクスラー (Wechsler. D. W.) によって，WISC (Wechsler Intelligence Scale for Children) が開発され，わが国でも活用されている。

### [b. 性格検査（人格検査）]

個人の心理的特性や環境への適応の仕方などを測定する。性格検査には次のようなものがある。

#### 〈面接法〉

面接により，行動や表情を観察し，自己を語らせることにより，個人の特性を判定する手がかりを得る。自由面接だけでなく，催眠状態での面接，ストレスをかけた状態での面接，集団の中での面接などがある。

#### 〈質問紙法〉

検査を受ける人（被検査者）が質問項目に対して自己評定する方法。性格、不安傾向、態度、興味、意欲、発達、社会性など、様々な側面が測定できる。信頼性・妥当性も高く、結果・判定も客観的に行なえ、個人内の特性の特徴をプロフィールで知ると同時に、対象となる母集団の中での相対的な位置も、標準化された基準に照らし合わせることができる。

#### 〈投影法〉

あいまいな刺激（図版）を提示し、それへの反応や解釈の仕方によって、被検査者の性格を測定する方法である。人はあいまいな状況に置かれると、その状況を自分なりに意味づけするものと考え、背後にある願望、動機、不安、葛藤を明らかにしようとする。代表的なものには、インクのしみのような図版が何に見えるか聞かれた反応から診断するロールシャッハテストがある。また、絵を見て空想した物語を語ることを分析して人格を明らかにする TAT、その幼児児童版の CAT などがある。

#### 〈作業検査法〉

被検査者に一定の作業を行わせ、その結果から人格特性を分析する方法である。代表的な内田クレペリン精神検査では隣り合う 1 桁の数の足し算を行ない、時間の推移に伴う作業量の変化で結果を診断するものである。

#### [c. ソシオメトリー]

学級のような小集団のメンバーの関係や集団構造を分析・解明する方法である。モレノ (Moreno, J.L.) によって創始され、主にソシオメトリック・テストを使用する。集団メンバーの間の好き、嫌いの感情からメンバー相互の選択関係や排斥関係を調べる。学級での個別指導や学級づくりに活かすことができる。

#### [d. 親子関係診断検査]

親子関係を把握する方法。「親子関係診断検査」（品川不二郎、品川孝子）では、10 分類で親子関係をとらえる。「PCR 親子関係検査」（親子関係研究会）では、母親の態度を 4 つの観点でチェックする。

#### [e. 適正検査]

「適正」とは、学習や経験を通して獲得することが可能な個人の特性である。進学適性テスト、職業適性テストなどがある。

## 4 子ども理解をもとにした指導

目の前にいる子どもがどんな子どもか、問題があるとしたら、その問題はどこからどのようにして生み出されてきたか、子どもの言動の背景を明らかにすることが子ども理解である。保育者・教師がその子どもを理解する過程でみせる受容的な態度が、子ども自身の自己理解を深める指導にもなっている。

子ども理解を指導に結びつける観点として「なぜ、こんなことばかりなのだろう」と背景を探る視点から一歩踏み込んで「このことをすることで、何を得しているのだら

う」と考えてみる方法を菅野(1995)が提案している。

例えば、怪我をした、お腹が痛いと言って、頻繁に職員室に来るAさんの行動を「職員室に来ることで、Aさんはどんな得をするのだろうか」という視点で考えてみると、次のような、「Aさんが得すること」が考えられる。

- ・先生にやさしくされ、手当をしてもらえる。
- ・他の子どもから、注目される。
- ・先生から母親に伝えられ、母親が心配してくれる

菅野は、子どもの問題行動は、自分が本当に求めているものを、「困った行動という形でしか表現できないため」ととらえ、行動に隠された欲求を読み取ることが「子ども理解」を深めると述べている。そして、「困った行動」という形で表現しなくても、人には必ず伝わることを教え、周りからも認められ、自分にとってもプラスになるような方法で自分の存在を輝かすことができることを教えるのが子ども理解を活かした指導であると指摘している。

Aさんの指導を考えると、Aさんが何かと理由をつけて職員室に来なくても、周りの関心を得たいという欲求を表現できるように援助することや、母親の注目を得られるように環境を整えることが適切な指導となる。

## 5 子ども理解の要点

### (1) 保育者・教師の自己理解

子ども理解は、保育者・教師の人生観、教育観、子ども観により異なることがある。例えば、「動きが多く目立つ子ども」に対して、A先生は、「活動的で明るい子」と肯定的にとらえるが、B先生は、「落ち着きのない子」と否定的にとらえる。

保育者・教師は自分自身が子どもをどのように理解する傾向があるかを自己理解して肯定的に理解するように努める必要がある。そのために、保育者・教師は自分自身の自己理解を深め、子どもとのかかわりにおいて自分の言動をコントロールする学習を継続したいものである。

### (2) 保育者・教師の受容的態度と姿勢

子どもの言動や心の中に動いている感情をありのままに受容し、理解することに努める。子どもが保育者・教師から受容され、理解されたという経験があつて初めて、自分以外の人を受容することができ、自己理解を深めることができる。

### (3) 共感的理解と客観的理解の統合

2つの理解を統合し、目の前にいる子どもをよりの確に理解するように努めたいものである。子どもは日々刻々成長し変容しているので、理解も刻一刻と変わる必要がある。また、かかわりによって生まれた変化によって理解も変わる。子どもの変化に添って、

温かく、かつクールにかかわって理解に努めることが求められている。

#### (4) 組織を活かした多面的な理解

一人の保育者・教師の理解だけでは一面的、主観的になりやすいので、複数の目で理解する。園・学校の教育相談などの組織を活かし、多面的に理解する必要がある。また、子どもにかかわる保育者・教師同士が協力して自己理解・他者理解を深めあう姿を示すことで、子どもは「理解すること・理解されること」を学ぶのである。

## 6 演習で「理解」を体験する

### (1) 〈演習1〉人物画テスト

描画テストの一つである「人物画テスト」により、自己理解する。人格を診断する方法に、描いた絵をもとにして分析する「描画テスト」がある。「人物画テスト」のほかに、樹を描く「バウムテスト(樹木テスト)」があり、人物よりも抵抗なく描くことができる。また「HTP テスト」と呼ばれ、一度に人・木・家を描かせるものがある。さらに、人物画を描かせるなかに自分の家族を描くものがあり、「家族画テスト」と呼ばれ、家族関係を理解する一助となる。

①鉛筆(軟らかいもの) 消しゴム。A4判の白紙(画用紙)を使用する。

②1枚目の白紙に、人を一人、なるべく頭から足まで、全身を描く。頭の中に思い浮かべる人を描く(絵や写真を写さないで)。上手、下手は関係ないので、安心して描く。時間の制限はない。

描かれた人物の性別・年齢・性格・趣味などを余白に書く。自分の性と反対の性を描いた人は、もう1枚の用紙に同性の人物を描く。

③自分で描いた絵を見て、自分の人格の様々な側面について考え、書いてみる。

#### ④「人物画」の「分析の視点」

描かれた人物は、描いた自身の人格を象徴している自己像である。描かれた絵(人物)からは、その人の人格のいろいろな側面が読み取れる。

- ・描かれた人物の女性らしさ・男性らしさから、その人の女性らしさ・男性らしさを
- ・服装などから役割意識などを
- ・大きさ・描く位置・姿勢・動き・手足の位置・全体的なはつらつきなどから有能感や自己肯定感を
- ・目を閉じたりうつむいたり、背を丸めたり、不安定に傾いた人物像からは不安感を
- ・胸を張ってしっかりと立っている人物像からは自信を
- ・手足を体にそえて直立している人物像に比べ、伸び伸びと両手を広げて動きのある人物像からは積極性や活動性を
- ・表情や服装などの全体的な雰囲気から、活気のある生活かどうかを

⑤自分で描いた人物画について、「分析の視点」を参考にしながら読み取り，解釈する。

### (2)〈演習2〉二人組で話をする

二人がカウンセラー役とクライアント役になって，話をする。クライアント役は自分について語り，カウンセラー役はクライアント役の話をしっかり聴き，身体的動作にも気を配り，傾聴的態度を演じる。

①話を聴いてもらった感想を書く。

②話を聴いた感想を書く。

③自分への気づきを書く。

### (3)〈演習3〉あいさつゲーム(となりのとなり)

構成的グループ・エンカウンターの一つである「あいさつゲーム」で自己理解・他者理解をする。

①ゲームの解説

8人前後のグループをつくり，リーダーが「〇〇の好きな△△です」のように自分のPRと名前を言って自己紹介する。次に，左隣の人が「〇〇の好きな△△さんの隣の□□の得意な▽▽です」自己PRしながら自己紹介する。さらに，その左隣の人が「〇〇の好きな△△さんの隣の□□の得意な▽▽さんの隣の◎◎を頑張っている◇◇です」と自己紹介する。以下，左隣に進むごとに，前に名乗った人のPRと名前を言ってから自分のPRと名前を加える。

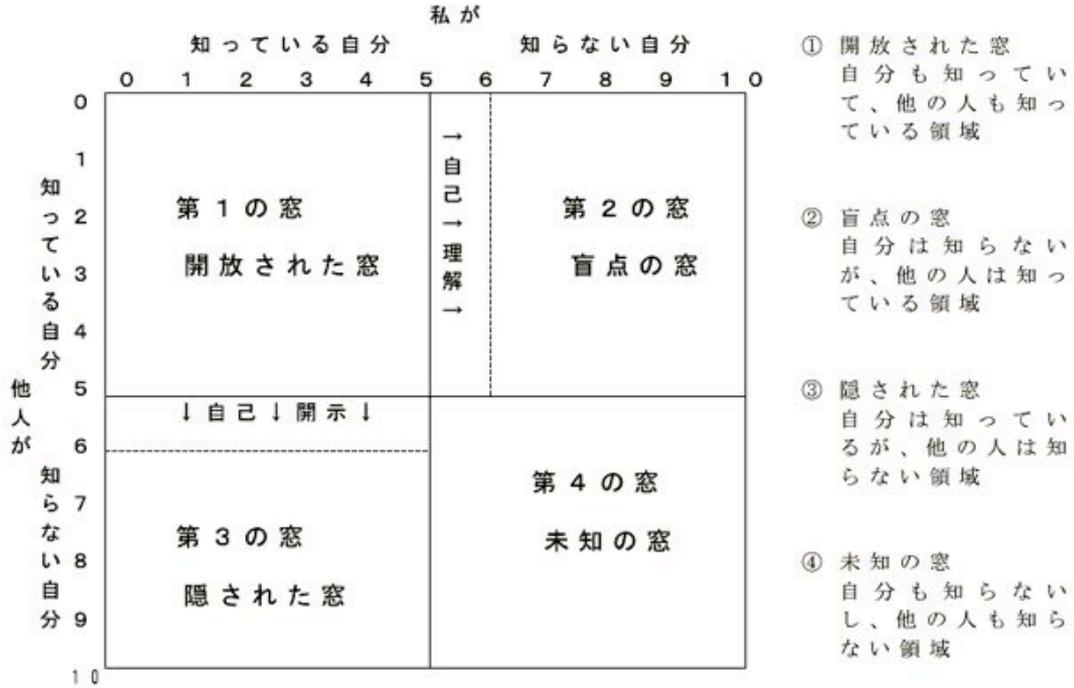
②ゲームを振り返り「自分への気づき」を書く。

③ゲームを振り返り「他者への気づき」を書く。

(4) 〈演習4〉「ジョハリの窓」

他の人との関係の中で「自分を理解」するための心の窓

① 「ジョハリの窓」



②自分の「開放された窓」の具体的なことがらを書く。

③自分の「隠された窓」の具体的なことがらを書く。

(5) 「人物画テスト」「二人組での話」「あいさつゲーム」の三つの演習を通して学んだことを整理する。

①自己理解がすすみ、「盲点の窓」が「開放された窓」になった自分について書く。

②開示がすすみ、「隠された窓」が「開放された窓」になった自分について書く。

7 事例

次の事例を読み、どう理解し、どうかかわったらよいかを考える。

### (1)「孤立しているAさん(小学校3年生,女子)」の事例

#### ①Aさんのプロフィール

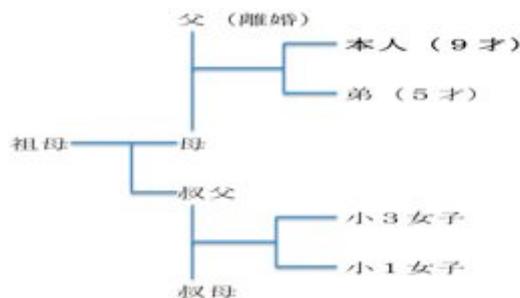
背が高く,走るの速く,ドッジボールが強い。学習成績は中ぐらいで,継続力が無い。欠席はほとんどない。やや乱暴な言葉をつかい,男子と口げんかをする。自分勝手にいばるので特に女子から嫌われ,孤立している。

#### ②家族状況・生育歴

- ・ 父親は本人が5歳のとき離婚。父親は母親に対して,酔っ払って暴力を振るっていた。
- ・ 父と母の離婚後,母の実家に同居している。
- ・ 叔父の子ども(小3,女子)は成績が優秀で祖母や母親からよく比較された。
- ・ 母親が離婚したころ,弟が生まれたばかりであり,欲求不満の状態であった。
- ・ 母親は離婚した不安をAさんにぶつけていた。

#### ③問題の概要と指導経過

- ・ 4月, 学級委員に立候補したが,1票も入らず,班長にも選ばれず。
- ・ 5月,ソシオメトリック・テストにおいて,誰からも選択されず,排斥が12(女子10,男子2)であり,排斥の理由は「わがまま」「いばる」「怒りっぽい」であった。
- ・ 6月, 掃除の時間に教卓の上に乗って,はたきを振り回して,命令口調で指示をする。注意をすると,言い訳を言って甘える。
- ・ 7月,しばしばトラブルを起こす。担任が強く叱ると反抗的な言動を見せた。母親と面談したとき父親のことが話され,Aさんにつらい思いをさせてしまったことが話された。
- ・ 8月,学年主任,スクールカウンセラーに相談し,Aさんのよいところを認めることにし,ほめる機会を多くし,叱るときもスキンシップを通して諭すことにした。また,家庭訪問をして母親とゆっくり話し,Aさんのよさを伝え,悩みを受け止めるようにした。
- ・ 9月,2学期の始業式には出席したが,2日目に登校せず,学校と家庭で探したが見つからず,Aさんは近所で1日過ごして帰宅した。



a. Aさんの言動の理解を考える。

b. 教師の自己理解を考える

- c. Aさんの自己理解を考える
- d. Aさんや母親へのかかわりについて考える。
- e. 担任へどのような援助をすればよいかを考える。

《参考引用文献》

- ・伊藤隆二・松原達哉『心理テスト法入門』日本文化科学社，1986
- ・樺澤徹二『学校カウンセリングの考え方・進め方』金子書房，2003
- ・清水勇・樺澤徹二『教師の力量を高める 生徒指導・学校カウンセリングワークブック』学事出版，2000
- ・清水勇・阿部裕子『親・保育者のための 子育て・保育カウンセリングワークブック』学事出版，2006